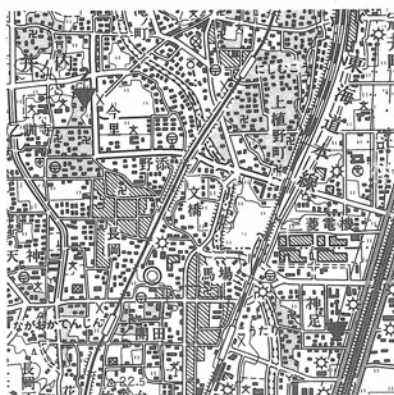




(京都西南部)

京都・長岡京跡 (3)

- 1 所在地 一 京都府長岡京市神足麦生、二 同市今里四丁
- 2 調査期間 一 一九九四年(平6)三月～四月、二 一九九五年一月～三月
- 3 発掘機関 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 原 秀樹
- 5 遺跡の種類 一 都城跡、二 古墳・都城跡
- 6 遺跡の年代 一 長岡京期(七八四～七九四年)、二 古墳時代前期～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 左京六条二坊三町

(左京第三三六次調査)

当地は左京六条二坊三町の北西隅に位置しており、調査では東一坊大路東側溝を中心に土坑、溝、柱穴、六条々間小路南側溝の一部

を検出した。本地点の東一坊大路東側溝は、幅二・〇～二・三m、深さ〇・四～〇・六mである。溝底が深くなる南側部分には、両岸を杭と側板で護岸した橋と考えられる施設があり、約四・五m分確認した。長岡京の橋としては最大級であり、同様の規模をもつ門が大路に面して設けられた可能性が強い。このほか、交差点の南では平らな面を上にして一列等間隔に並ぶ三個の人頭大の石と、転がったとみられる同じく石を三個余り検出した。一列に並ぶ石は、層位的に側溝が半ば埋まった段階に置かれていることから、遷都当初の造営から時間をおいて造られたことがわかる。これは石の上に板などを並べた橋ではないかと考えている。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・二彩陶器・瓦・木皿・糸巻き・鉄釘・神功開宝・獣骨・碁石などが出土し、また斎串・櫛・人面墨書土器・土馬・桃の種・銅銭が多い点は、条坊交差点での祭祀を物語るものである。このほか土師器と須恵器の食器類には「大」「器」「吉」「万」「口足」「山」と墨書したものや、「十」「井」「卅」「米」「井」などの記号を墨書、線刻したものが出土している。

二 右京三条三坊四町(右京第四八八次調査)

調査地は、長岡京の西二坊大路と三条条間小路に面する右京三条三坊四町の北東部に位置するほか、古墳時代中期前半に築造された前方後円墳である今里車塚古墳の後円部および周濠の一部と重なっている。また、西方には郡名を冠する乙訓寺があり、当地は古代

より乙訓郡の中心地域であったことがうかがわれる。

今回の調査は、長岡京跡右京第四八八次調査（今里車塚古墳第八次調査）として実施したものである。同古墳は、京都府教育委員会が一九七八・七九年に実施した右京第二一・二六次調査（今里車塚古墳第一・二次調査）で初めて確認され、長岡京の西二坊大路が、後円部と南北の周濠部分を路面に改変した状況が明らかにされた。周濠から出土した人面墨書土器や人形、土馬などの祭祀遺物や二彩陶器は、古墳の削平や埋め立てにともない祭祀が行なわれたことを物語っており、今回も同様の祭祀遺物が出土した。周濠からは、埴輪や木製品のほか、長岡京期と平安時代前半期の遺物が出土しており、中世には周濠を分断して杭で護岸した土堤が築かれ、溜池に利用されている。このうち古墳に関する遺物では、他に類例のない大型の木製飾り板の出土が特筆される。なお、一九九〇年の右京第三五二次調査（今里車塚古墳第七次調査）では、周濠内から木簡が一点出土している（本誌第一三三号）。

8 木簡の积文・内容

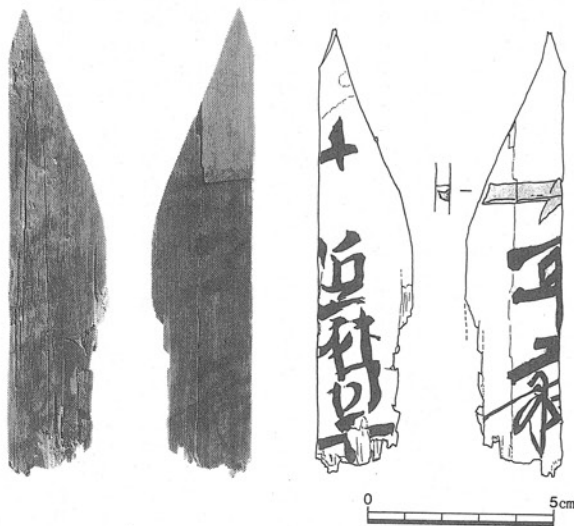
一 左京六条二坊三町

(1) 〔年カ〕
□麻×

・ □ 延暦四×

(118)×(25)×5 081

人名と年号が表裏に記されている。文字は肉眼でも確認できるが、一部の文字は破損による折れと傷みで判読できない。木簡には転用時に付けられた墨線と斜めに切断した跡があり、再利用にあたって加工や細工が行なわれたことがわかる。木簡の形態・用途、人名については断片のため明らかにできないが、文字が大きく当初の材の幅は現状のほぼ二倍に復元できる。



二 右京三条三坊四町

(1) ・く (符籙) (顔カ) □

・く (符籙) (文様カ)

(61) × (17) × 4 039

(2) (符籙カ)

(153) × (33) × 4 081

木簡は、周濠北西部の下層から二点出土した。ともに墨書が明瞭に残る呪符木簡であるが、その全容については不明である。(1)は一方の側面と上下端を欠損しており、切り込みについては二次的な可能性もある。表面は長方形の区画の中に□(星)を三から四つ横に並べ、下には顔らしい表現がある。裏面にも□、山などを配しており、欠損する一方にも同様の□、山を並列した可能性が高い。両面には、上部に曲線で表現された記号または文様が描かれているが、傷みと折れで何なのか判然としない。(2)は真ん中で左右二片に割れており、一部傷みで墨書が見えないうえに上下端を欠損している。表裏に削り痕が残る。中央に七個の○(雷)をほぼ左右対称に並べ、その両外側には六回螺旋状に尾を巻く符を配し、上下に門符かと思われる中国の符に似た表現をするものがある。

これらの木簡については他に同様の出土例が見当たらず、今後同様の事例が明らかになることが待たれる。

木簡の年代については、周濠が中世まで完全に埋まることなく機

能した状況を考えると、長岡京期から中世前半期までの時間幅があるが、木簡が出土した下層の土器から判断すると、長岡京期から平安時代前半期の幅におさまるものと考えられる。

なお釈読にあたっては、奈良大学水野正好氏、向日市教育委員会清水みき氏のご教示を得た。

(原 秀樹)

